

# 季節を愛(め)でる

職員室のカウンターの上に、何やら不気味な物体が置かれています。気付いていますか。その横には「これは何でしょう? 知っているかな」というメッセーヂが添えられています。私は久しぶりに見ました。そして、幼い頃それを口にした思い出が蘇ってきました。これは「石榴(ざくろ)」と言います。中に赤い実が無数に詰まっています。その身を口に入れ軽やかむと甘いような酸っぱいような味がします。最後に、種を口から吐き出します。子どもたちには、どれくらい種を飛ばせるか競っていたものです。

石榴をディスプレイしてくれたのは、天徳に住んでいるO先生です。彼は季節の花や自然恵みをもってきてくれます。先日は、生徒玄関の奥に、毬(いが)に入った栗がディスプレイされていました。気付きましたか。毬に入った栗を初めて見るという人もいたかもしれませんね。知っていて得になるということはありませんが、日本に住む者としては季節を愛でる思いはもってほしいものです。

私は、「日本に生まれ住んで幸せだ」といつも思っています。理由はいくつかありますが、その一つが「四季を味わうことができるから」ということです。過ぎやすいと思う季節や好きな季節はもちろん私にもあります。しかし、一年を通して四つの季節が味わえることは日本に住んでいるからこそだと思っています。

日本の文学は、日本に四季があるから誕生したと言っても過言ではありません。どの国にも文学はありますが、共通しているのは最初に登場したのは詩であるということです。いきなり物語は生まれません。日本においても「然(しか)り」です。日本最古の文学は短歌という詩ですからね。

その短歌の中に、季節が効果的に彩られていたり、季節が象徴されるものが入っていたりします。日本の文学は、季節と切っても切っても切り離せない関係だと言えるでしょう。

その一つが、二年国語の中に出てくる清少納言作の『枕草子』ですね。彼女は、四つの季節全てにすばらしさを見つけています。現代人のように、「お年玉がもらえるから冬(正月)がよい」とか「夏休みがあるから夏がよい」という打算的な季節の味わい方ではなく、「その季節らしいところがよい」という、季節そのものを楽しむ味わい方をしています。今の日本人が少しずつ忘れかけている部分かもしれないかもしれません。

そうならないように、O先生は季節の実りを北中学校に運び、若者の皆さんに季節を味わってもらおうとしているのだと思います。彼は「天徳の清少納言」かもしれないですね。見た目は全く違うけどね。(九月二十九日 記)

